

現代日本語の敬語使用

アリソン カリ

序

日本に独特の習慣や考え方があるのと同様に、日本語にも色々な特徴があることは当然のことであろう。日本語における敬語の使用を調べると、敬語が日本社会の様相を反映していることが分かってきた。これは言語が社会を反映することの一例であると思われる。また、歴史の流れに伴う社会の変化に従って、敬語の使用も変化してきた。

本レポートでは、敬語が反映する社会的な態度を研究し、敬語がどのような役割を果たしているか、どのような思想を強化するかということ調べた。その結果、敬語に関する言語的な知識を習得するだけでなく、何よりもそれが使用される背後の文化的な状態を理解し、それにふさわしい使い方を習得することが大切であるということが明らかになった。

歴史的な背景

どうして日本語の敬語体系はこれほど複雑なのであろうか。確かに色々な原因があるが、ここで歴史的な影響に簡単に触れる。

七世紀には聖徳太子が中国から日本に様々なことを移入したが、その時に孔子の思想を紹介し、「和」という概念やはっきりした階層意識を主張した。この枠組の中で、和解や調停によって人間関係がうまく流れると思われていた。

'When those above are harmonious and those below are friendly, and there is concord in the discussion of business, right views of things spontaneously gain acceptance.'

[1]

何世紀間も武士が日本の支配階級を占めていた。武士道では終身忠誠が最高の道徳として認められた。そして序列は厳しく守られた。一方、当時の農民の階級では暮らしに十分な農作物を得るため、互いの協力や支援が必要で、共同社会の形で暮らしていた。こういう区分の中では、統一感が非常に大切であり、また当時の封建的な社会では各階層の間のはっきり決まった関係が秩序維持に必要であった。

この背後、第二次世界大戦の終りまで、天皇がずっと神として承認され、大変尊敬すべき方と思われていた。

このような状態は、自分より目上の人を尊敬することの意識を生じさせ、集団の和を保ち、事なくやっていくことが当時の社会の土台であったにちがいない。

さて、この背景の要因はある程度敬語に影響を与えるが、特に最近の五十年は敬語の形式と使い方が著しく変化してきた。

(2)

特に、第二次世界大戦中に敬語の乱用が大きかった。例えば、日本の優越を宣伝するため、そして天皇の神性を表すため敬語が利用された。1942年の小学校の国定教書「初等科国語巻七」には下記のように述べられている。

「敬語の使い方によって、尊敬や謙遜の心をこまやかに表すことのできるのは、実にわが国語の一大特色であり、世界各国の言語にその例を見ないことである。古来わが国民は、皇室を中心とし、至誠の心を表すためには、最上の敬語を用ひることをならはしとしている。さうして、また長上を尊ぶ家族制度の美風からも、丁寧な言葉遣いが重んじられている。わが国語に、敬語がこれほどに発達したのは、つまりわが国がらの尊さ、昔ながらの美風我言葉の上に反映したのにほかならないのである。」[2]

また、1944年に刊行された「国民礼法精説」によると、言葉遣いや敬語の乱れは、「乱臣乱子のはじめ」とまで決めつけている。敬語は目上の人を尊ぶことと醇風美俗を表した社会秩序を維持する働きもあったであろう。

戦後、こういう意識を表すようになったので、敬語を廃止しようということが主張されたが、結局廃止されず、ただ簡素化し、基本的な働きを換えることに留まった。確かに天皇のいわゆる人間宣言がこの変化をある程度支えた。1952年に文部大臣は「これからの敬語」という文書でこう述べた。

「これまでの敬語は、主として上下関係に立って発達してきたが、これからの敬語は、各人の基本的人格を尊重する相互尊敬の上に立たなければならない。」[3]

さて、これから40年後の現在、敬語はどのようになっているであろうか。何人かの学者の定義を見てみよう。

「人間関係をスムーズに保つための言語的手段、すなわち、‘円滑なコミュニケーションのためのことばの使い分け’といえよう。もっとこまかく‘話し手と聞き手との社会的、心理的へだたりの度合いを軸にして、素材的内容や状況に配慮しながら変える話し手の言語行動と語形式’」[4]

「現代敬語は‘敬語の言葉’というよりは‘礼の言葉’というほうがより適切なように思われる。」[5]

「相手に対する話し手の敬意の有無の問題より、公の場での社交上の使用や、話者自身の品格の保持のための使用に移行しつつある。」[6]

「日本の敬語は、単なるエチケットや形式的な礼儀といったレベルを越えたダイナミックな行動論と積極的にかかわっているもので、それが日本文化の繁栄を支える原動力になっている。」[7]

これらの引用は敬語の変化を明らかに示している。敬語が誰に対するものであるのか、どうして使われているのか、どうやって使われているのかというのは、使われる時の人間関係と社会的な場面によって決まるが、下にその主なものを分類し、考えていく。

敬語の持つ効果

色々な分析、または区分があるが、平林周祐と浜由美子著の『敬語』に載っている下記がもっとも正確で分かりやすくまとめられていると思う。(1)－(4)は基本的に敬意と関係があるが、その反面、(5)はまったく反対の場合に使われている。

(1) 尊敬

目上の人、身分や地位や年齢が上の人に対する尊敬の気持ちを表す。

(2) 社交上の礼儀として改まった効果

会議、目上の人と同席しているような改まった場での話、女性同士の会話に多く見られる。

(3) 相手と距離を置く効果

親しくない相手に対して丁寧に話したいという意識とともに「まだあまり親しくないのだ」「他人なのだ」という意識を表す。親しくなったら普通体で話すようになっていく。そうしないと、疎外として認めることになり、丁寧ではなくなってしまふ。この場合は(5)と同様に敬語の一般的な働きとは違う。

(4) 話し手に品格、威厳を与える効果

敬語を自由に駆使できるということにより話し手に品格が備わる。したがって敬語が教育レベルや社会的な階層の高さを表すことも多く、このような効果のため敬語を多用する女性もいる。

尊大、あるいは軽蔑に聞こえる場合もある。

(5) 皮肉・からかい・ふざけの効果

親しい者同士の会話で、一方が急に敬意の高い表現を使ったりする際に見られる。喧嘩の場合には距離を置く働きをする。特に夫婦喧嘩には、妻が夫に対して使う。この場合の敬語は敬意を表さず、むしろ怒りあるいはあざけり、からかいを表現するからであろう。

敬語が使われている状況

ここで、敬語が使われている状況を三つに分け、それぞれの状況で敬語のどの効果あるいは目的がよく当てはまるかということを考えていく。重なっている場合があるが、その時には敬意の度合いが高まる。

a) タテの人間関係 (上・下)

話し手と相手、または三人称の相対的年齢、社会的な関係、地位、職業などで定着している関係によって敬語を使い分ける。

日本のいわゆるタテ社会においては上記の要因によって生じる序列はたいへん気を使うことである。格別に会社の中でこれは目立つ。地位はだいたい年齢、あるいは勤務年数の長さによる。このため、自分より年上の人には必ず目上の人として扱うべきであり、目下の

(4)

人に対しては才能や長所その他にかかわらず、敬語が使われない。その一方先生や医師などの社会が偉いと認める人に対しては、年齢が若くても敬語は普通使われている。

けれども、ただ上下の関係として考えると誤解を生むであろう。敬語は多くの場合、それよりも、利害関係者の恩恵・被恩恵の意識から生じるものである。例えば、売り手は必ずしも買い手が目上の人だと認めるわけではない。むしろ、商売をするため、客のひいきが必要なので、言葉で好意を表すのであろう。

なお多くの場合、上・下と恩恵・被恩恵の意識が両方ともある。例えば、先輩、教師、上司などにお世話になった後輩、学生、部下は敬語で目上の人に対する尊敬だけでなく、恩の気持ちを表す。

上記の場合には、(1)の「尊敬を表す効果」が普通である。(4)の「品格の効果」も美化語としてよくでるであろう。

b) ヨコの間関係 (内・外)

話し手と聞き手／話題の人が同一の集団に属しているかないか。

中根千枝の『タテ社会の間関係』という本では日本の集団主義の要素や影響について色々な説が書かれている。著者は個人の属性よりも、個人の属している集団の方が日本の社会の中で重視されていることを主張する。というのは、グループに一体化することに対して自分の役割あるいは地位に対してより強い意識がある。この概念は言語に大きな影響を与え、言葉遣いには使い分けることによって、積極的な働きも消極的な働きもある。

外の人に対して敬語は丁寧さを表しながら、まだ親しくないので距離を置くために使われている。話し手、あるいは話し手側の人については謙譲語を使い、相手と相手側の人について尊敬語を使うことは普通である。適切に使われていると敬語はコミュニケーションをよりスムーズにする。

その反面、親しくなった人に対して敬語を使いつづけるとそれは疎外になってしまう。

使う場合も程度のふさわしさも主として場面に応じて決まっている。

一番基本的な例は家族の内と外の間関係であろう。全員の呼称はどの側と関係があるかということによって決まっているほど区別されている。

例えば話し手の家族について外の人に対しては、‘姉’

相手・三人称の家族の一員については、‘お姉さん’

話し手の家族の一員本人に対しては、‘お姉さん’

明治時代の複合企業は‘家’と呼び、元々家族の商売だったので内と外の間意識が家と同様に強かった。こういう考え方は現在の社会に留まっており、‘貴社’と‘弊社’の言語的な区別があるまで内と外がはっきり分かれている。

「まるがかえ」という表現が従業員と雇い主の間関係を明瞭にする。というのは、従業員

の労働だけではなく、個人全体として採用される。だから会社に属するのは家族に属すると同じように認められているであろう。なお、会社の場面は公式な場合が多いので、言葉の上でより気を使う時が多い。

「日本の場合は、個人というものが、個人の属する集団の中でのありかたに重点をおいて考えられている．．．個人と個人は、互いに依存して集団の和を保つこと、事なくやっていくことに神経が使われる．．．個人の主張より人の気持ちを考え、時にはあきらめ的な気持ちから集団の目標達成のために個人の主張を譲りがちである。」[8]
 こういう集団観は敬語の使用によって反映されている。

(3)の相手と距離を置く効果はここで使用されている。敬語を適切に使うと、外との関係がうまく行くようになり、内の同一感を支える。

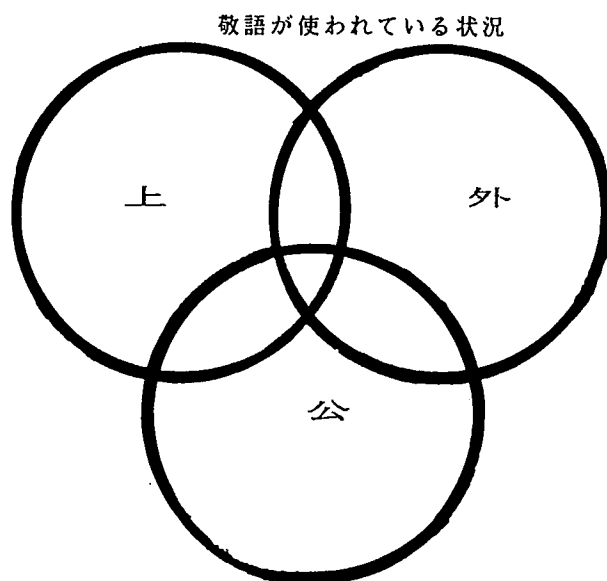
c) 使う場

改まった場（会議、学会、発表会、スピーチ、手紙など）で、相手あるいは会衆との上・下／内・外の関係にかかわらず敬語を使うことがよくある。

「現代の敬語使用は、原則的にウチ・ソトにウエ・シタがからみ合うかたちで行われているうえに、より公的な場かより私的な場かという状況が覆いかぶさっている。」[8]

儀式が特に大切だと考えている日本人にとって、改まった雰囲気を生じる役を果たす敬語は絶対必要である。場面を真剣にも気軽にも言葉遣いによって変えることができる。

敬語はここに尊敬と謙譲よりも、丁寧さや美化の働きをしていると言えるであろう。(2)の社交上の礼儀として改まった効果と(4)の話し手に品格・威厳を与える効果がここで際立つ。



以上の三つの使う状況を上の図で示している。重なる部分は敬語の度合が増加し、より気を使うべき状況である。最大限の使用は皇室に対してであろう。非常に上、外の人々として認められ、公式の場で社会と接触する。一方、重ならない部分、特に他の状況が全然反対の場合には、敬語が使われていない時もある。

この簡単な図が一般に使われている状況を表すが、確かに原則的な用法と現実の用法の間に違いがある。色々な調査の結果によると、多くの人、特に若者は敬語が煩わしいと思ひ、敬語遣いに自信を欠いており、あまり使わなくなってしまう。そして、使うべき範囲の中でも敬語は使われていない場合もある。付き合いに行き、酒をたくさん飲んだら、普通の言葉、あるいは下品な言葉で目上と外の人と話す。また、外の人明らかに年下で、場面が私的であれば、多分敬語が使われていないであろう。

なお、男の用いる言葉と女が用いる言葉とでは、差異があり、女性により丁寧な言葉が期待されており、書き言葉には美化語などの使用によって男女の話し手を区別できる場合が多い。

外の人に対して、自分と関連がある人について敬意を表すことは不似合いだと思われている。もし第三者が尊敬すべき人で、同じ場面にいる場合には、どうやって敬語を適切に使い分けたいかと困る時がない日本人はいないであろう。

テレビやラジオの機関はもっとも気を使う必要があるであろう。売り手が買い手を取り扱うように情報をつたえる番組などでは、視聴者に対して敬意を表し、そして模範を示すべきである。ただし、下記が表すようにこれはいつも守られてはいない。

「テレビの若いタレントなどが視聴者を意識するはずの公の場で、お笑いの番組ではなくても、年配の司会者に対して、くだけた、あるいはぞんざいなももいいをしたりする場合である。」[10]

このように、原則的な用法がありながら、言葉遣いが規定できるものではないということには、現実に個人によって敬語使用が異なるからであると言えよう。だが、教養のある人として見られたければ、用法に従わないといけぬ。

さて、こういう使用状況ではどのような言語的な用法が利用されているであろうか。敬語は大きく尊敬語と、謙譲語、丁寧語の三つに分かれている。必ずしも今使っている敬語が上の三つのいずれであるかを意識しているわけではないし、重なる場合が多い。重なっている場合の例として接頭語「お[ご]ー」が挙げられる。聞き手や目上の人、敬意を表すべき人の行為や物、状況についての「お仕事」「お帰り」などは、「お[ご]ー」が尊敬語として用いられているが、自分、又は「内」の人の行為や物についての「お礼」、「ご案内」などは謙譲語的に用いられ、「お金」「お酒」は丁寧語(美化語)として用いられている(『敬語。荒竹出版』)と言える。だが、普通の場合には尊敬語と謙譲語を間違えると失礼になってしまう。一般的に言えば、丁寧語は聞き手に配慮を示しながら、話し手の言葉遣いを上品にする目的がある。尊敬語は相手、それとも第三者の地位を高める

が、謙譲後は話し手や「内」の人を低めるものである。場面によってこの分かれの調和がないとおかしく聞こえる。つまり、文章全体の文体のバランスが必要である。

敬語が一番際立つ所は動詞の形式である。上記の分割は動詞形、あるいは特別な決まっている動詞によって区別されている。それぞれの分割には様々な表し方があり、敬意の度合によって使い分ける。

日本語では利害関係が動詞の使用によって明らかになる。授受を表す補助動詞「やる／あげる／さしあげる」、「くれる／くださる」、「もらう／いただく」の三組は下記のような情報を伝える。

「話し手が、事柄を述べる際に与え手側に立つか、受け手側に立つか、あるいはどちら側にも立たない、離れた立場で述べるかを、話し手がどこに視点を置くかということで捉えることができる」 [11]

上・下と恩恵・被恩恵の関係がどうかということは動詞あるいは補助動詞に含まれている。

動詞以外の敬語も動詞のように、敬語的成分を付けるものと特定の語を用いるもの（例えば、「ここ」に対しての「こちら」や「今度」に対しての「このたび」など）の三つに分かれている。敬語的成分を付けるものは接頭語あるいは接尾語によって上述の違いが区別され、敬意を表す。ここには丁寧語が多く美化として、丁寧なものよりも、話し手自身の上品さを保持し、改まった表現である。女性の中でよく使われている。

呼称は特に気を使う面である。人間関係を表すからである。例えば、最近の皇太子と皇太子妃との結婚式では儀式が行われたとたん、「雅子さん」が「雅子さま」になった。また、日本語においては代名詞が多く、場合によって使い分ける。目上・外の人に対して第二人称「あなた」を使うことができるだけ回避されている。

形式だけではなく、言い方も敬語を表すために大切である。日本語には婉曲表現が著しく多い。はっきり、率直に物事を言うより間接的なものの言い方が好まれている。日本人は「いいえ」ということがきらいな理由はこの点と関係があるであろう。また、よく文章を完成させないにもかかわらず、聞き手には話し手の言いたがっていることが分かる。たとえば、「その日はどうも．．」しか言わなくても、都合が悪いということが伝えられている。否定文、あるいは二重否定文はこれと同様にためらいを示し、より丁寧だと思われる。

コミュニケーションをスムーズにするために合槌も日本人によく使われており、聞き手がよく聞いていることを示す。

確かにこういう言語的な手段が様々あるが、それに身振りや態度が合っていなかったり気持ちがかもっていなかったりすれば、敬語を使う意味はないであろう。

敬語の使用がもたらす結果

(8)

調査によると、日本人は圧倒的に敬語が必要だと思っている。主な理由は、「相手を尊敬する気持ちを表せるから」や、「相手と自分の立場をはっきりさせて、けじめをつけることができるから」、「表現がやわらかく、人間関係を円滑にすることができるから」ということになっている。その反面、必要だと思わない少数の者は「よそよそしい感じがするから」や、「複雑で煩わしいから」や「敬語による形式的な表現よりも、個人的な表現を優先したいから」という理由を挙げた。

敬語はやはりメリットとデメリットがある。要約としてこれをいくつか考えていこう。

メリット

敬語は：－日本語をより美しくする

- －他者のことを大事にする意識を引き起こす
- －公式の場の雰囲気や簡単に作り出すことができる
- －団体の中で統一感や調和ということを促進する
- －恩恵を受けた人に対して感謝を表す

デメリット

－敬語はコミュニケーションの障害になる場合がある；

- ・使い間違ふことを恐れる
- ・上下の意識によっていつも気を使う
- ・相手の年齢、地位などが分からないと困惑する

－敬語は差別の意識を促進する；

- ・タテ社会の思想や価値観を深める
- ・女性は男性に対して、男性が女性に対するよりも多く敬語を使う

－タテマエの行動を引き起こす；

- ・社会が期待する通り、自分の気持ちにかかわらず、敬意を表さないといけない
- ・自分の意見を主張するのがむずかしい一人前で目立つことを避け、無難な道を選ぶ方がましである（いわゆる「まあまあ主義」）
- ・言うこととやることがたまに矛盾している－皮肉だけでなく、レポートなどが押し付けましい行動と同時に使うが、そんなときは全然丁寧ではない

－内・外の意識が明確にされ、他者を簡単に隔てられる

参考文献

- Kurt Singer 'MIRROR, SWORD AND JEWEL' Kodansha International 1973
(引用 [1] p264)
- 西田直敏 『敬語』 東京堂出版 1987
(引用 [2] p7、 [3] p18)
- 国立国語研究所 『敬語教育の基本問題』 大蔵省印刷局 1990
(引用 [4] p2, [6] p25, [7] p92, [9] p94 [1 0] p94)
- 文化庁 『待遇表現』 大蔵省印刷局 1971
(引用 [5] p27 [8] p27)
- 上野田鶴子 『授受動詞と敬語』 [kuno1977の引用]
(引用 [1 1] p42)
- 文化庁 『言葉に関する問答集19』 大蔵省印刷局 1993
- 平林周祐・浜由美子 『敬語』 荒竹出版 1988
- Nakane Chie 'HUMAN RELATIONS IN JAPAN' Ministry of Foreign Affairs, Japan 1977
- P.G.O'Neill 'RESPECT LANGUAGE IN MODERN JAPANESE' Charles E.Tuttle Co.1966
- Osamu and Nobuko Mizutani 'HOW TO BE POLITE IN JAPANESE' The Japan Times 1987